

浄土真宗 本願寺派 明鏡山照林坊調査報告書



株式会社 砂原組

730-0047 広島県広島市中区平野町1-16
TEL 082-243-7421

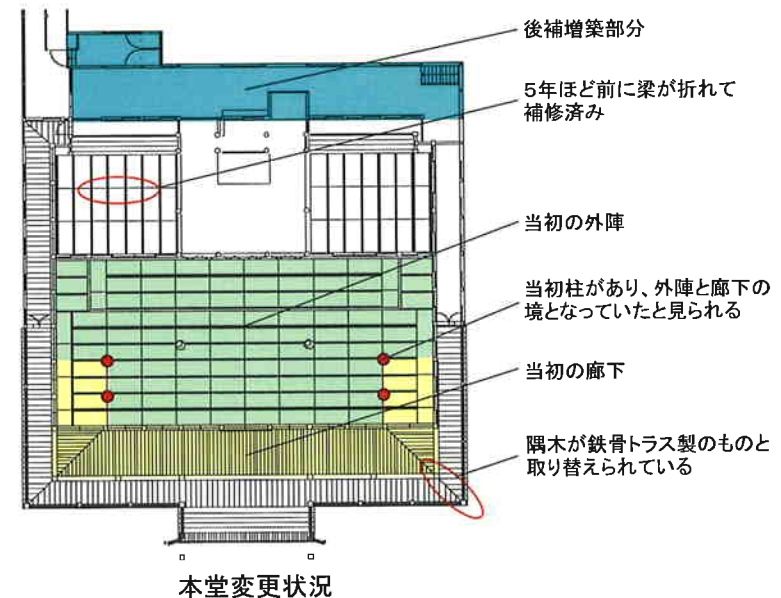
概要

名称	明鏡山照林坊本堂
住所	広島県広島市三次市三次町一二八〇番地
建立年代	嘉永5年(1852)
規模	桁行 24.188m 梁間 30.135m 平面積 728.9㎡
構造形式	桁行9間、梁間12間 入母屋造り

当本堂は嘉永5年の建立後、補修、増築が行われており背面2間及び便所部分は入母屋屋根とは別の下屋となっており後補の増築である。

また畳敷きの外陣は現在長方形の大広間となっているが当初は右図の位置に柱があり、T字型の外陣となっていたと推測される。

小屋組は修理が何度か行われており、隅木が鉄骨トラス製のものと取り替えられている。最近では5年ほど前に天井上の梁が折れて格天井が大きくなったため、鉄骨等による補強が行われている。



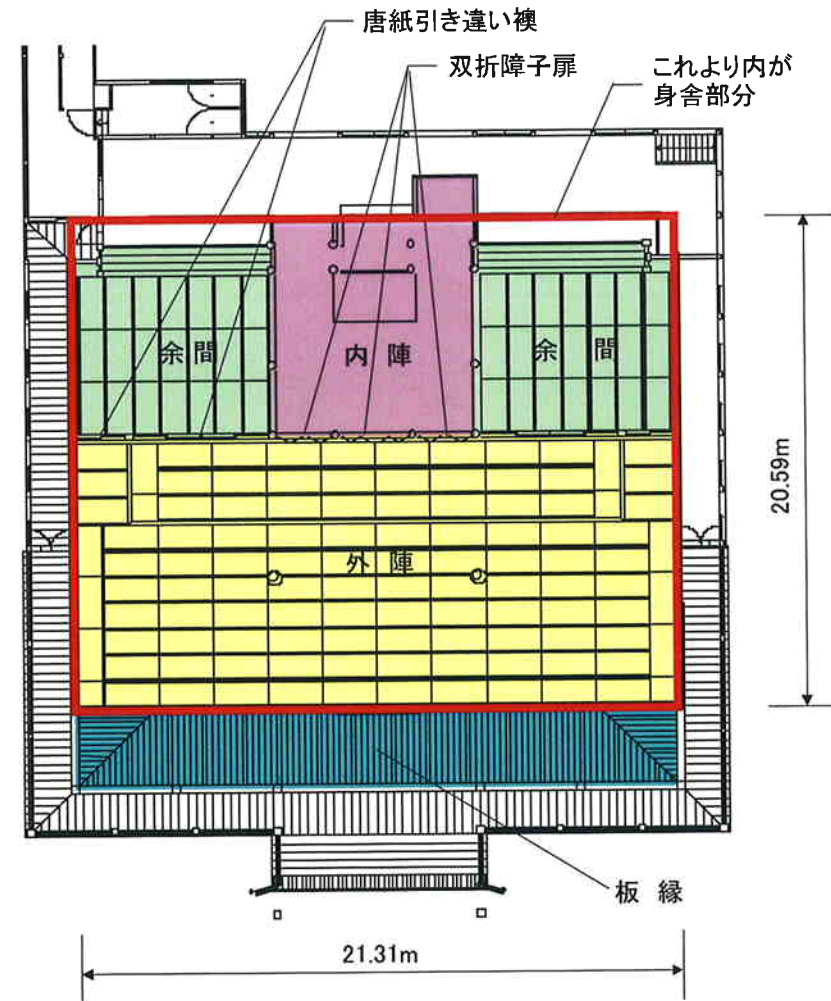
本堂解説

鈴木 充 工学博士
 広島大学名誉教授
 1934年6月29日生まれ
 元広島大学工学部教授
 元米子高等専門学校長
 元広島県文化財審議委員

明鏡山 照林坊は浄土真宗本願寺派の寺院であり、広島県三次の旧市街の東南隅を占める。照林坊がこの地に寺基を定めたのは慶長七年（1602）であると云われる。町の東南の寺地に東に向かい、山門（寛文五年 1665、広島県有形文化財）鐘撞堂、本堂（嘉永五年 1852）庫裡（享和元年 1801）が建ち並び、江戸時代の寺観を良く残している。

本堂形式は桁行21.31m、梁行20.59m（身舎部分）、向拝付き、屋根入母屋造棧瓦葺であり、正面、側面に雪見柱付き縁側を廻らす。身舎は角柱平三斗組で、拳鼻上に捨斗を置き天井桁を受ける。妻飾りは二重梁で本梁は一間間に置いた平三斗で支え、重梁は両端と中央に太瓶束を立てて支え、棟下も太瓶束を用いる。向拝は角柱上に連三斗付き梓肱木を置き、虹梁上に中備え蛙又を三具配する。木鼻は獅子、本堂雪見桁と海老虹梁で繋ぎ、垂木は湾曲したものを使っている。

平面は、正面一間（2.855m）を吹放しの板縁とし、続く奥行き5間分を外陣とする。内陣（奥行き3間）は



※身舎 本堂の底部分を除く部分であり、当本堂では正面三方を廻っている廊下と背面の増築部分を除いた範囲(上図赤線より内側)である

中央三間を内陣、両脇各三間を余間とする。建具は中央三間が双折障子扉、余間前は唐紙引き違いにし、上部に花鳥を彫った欄間を置くなど、真宗本堂の定型通りの構成を取る。内陣奥中央には仏壇を置き、来迎柱上には禅宗様二手先の組物を置き、彩色を施しているが、仕事の収まりが悪く、明治後期の改修と思われる。

外廻りの間仕切りは、鴨居下に新しく2本溝の鴨居を加えて、アルミ縁のガラス戸を引き違いにしており、旧鴨居の溝数は確認できないが、柱の風蝕から見て、もともと2本溝の引き違いの建具を使用していたようであり、その場合は腰高障子が考えられる。内陣、余間間は垂れ壁のみで仕切はなく、奥は間口いっぱいの仏壇がある。天井は各間同じような格天井とし、格間に紙置彩画を施す。外陣は円面に色彩付き百花を描くが、明治後期の作品である。内陣及び余間は円形文様で藤花の単色紋を型押ししているが、これは嘉永再建時のものであろう。内外陣境の柱頭には金欄巻き、頭貫、台輪等に雲紋や七宝の彩画が施されているが、いずれも明治時代後期の補修によるものである。

広島県は浄土真宗の盛んな地方であるが、近世の建築遺構が残っているものはあまり多くない。その点、照林坊が江戸時代末期のものであるが本堂を残し、その他、山門、鐘撞堂や庫裡など、主要な建物が揃っている点は評価される。

本堂は屋根葺き材がセメント瓦になっているが、もとは、凍結のこともあってこけら葺きであったと思われる。



角柱平三斗組



妻飾り



向拝(正面)



向拝(側面)



双折障子扉



唐紙引き違い

また、外陣の天井絵、内陣の来迎柱廻り、内外陣境の彩色など、明治後期に改修された部分はあるが、堂全体は江戸時代の特徴をよく残している。その特徴として第一に挙げられるのは、建物の天井高が非常に高いことである。平面に対して、内部の空間が非常に高いのは、江戸時代建築の一つの特徴であり、西本願寺の御影堂もその代表例の一つである。照林坊本堂は、建築の質の上では、西本願寺御影堂に及ばないながらも、立ち上がりの高い空間構成では西本願寺御影堂と共通する特質を備える。

つぎに、本堂外陣の東南、西南隅の2間四方には、もとは垂れ壁があった痕跡があり、この間は江戸時代には吹放しの間になっていた。これは飛檐間（ひえんのま）と呼ばれる部分であり、復原すると、封建的身分制度の厳しかった江戸時代の真宗本堂によく見られる平面形式になる。

内陣の荘厳や、内外陣境の彩画等は明治時代に改修されたものであり、建設当初の本堂は、現状に較べてはるかに質素なものであったが、彩画等は雲紋や七宝文を使い、柱の金欄卷も錦文を使用するなど、古式な文様が使用されていて、中世から続く安芸地方の建築装飾の伝統性を知るうえでも興味深い資料である。

以上、照林坊の諸建築は、江戸時代の中期から、後期に掛けて建設された主要建築が揃って残っており、地域の建築文化を知る上で、大切にしたい建築群である。

（平成18年6月22日 鈴木 充 記す）



外陣格天井



内陣、余間格天井



内外陣境丸柱柱頭部



外陣全景



当初は飛檐間であった位置



飛檐間(参考:福山市沼隈町 光照寺)

調査概要

調査は以下の項目について行った。

- ・全体の破損状況の調査
- ・床・小屋組の腐朽、破損状況の調査
- ・柱の傾きの調査
- ・地盤の沈下レベルの調査

破損状況

破損状況として大きく挙げて以下のような点が見られた。

- ①柱の傾き
すべての柱が正面方向に傾いている。
- ②壁、建具
外陣の外部に面する壁のほとんども貫部分でひびが入っている。また、建具には柱の傾き等による傾いたもの、施錠できないものも多く見られる。
- ③小屋組の経年、雨漏り等による劣化、構造上の不利
隅木の破損、梁の破損、腐朽が数箇所見られる。
また、小屋組自体が瓦葺用の小屋組でないため各所に瓦重量による変形が見られる。
- ④天井のたわみ、雨漏り
すべての格天井において、竿縁が下にたわんでいる、もしくは雨漏りによる天井紙の破れ、しみが見られる箇所がある。



①柱の傾き



②壁、建具



③小屋組の経年、雨漏り等による劣化
構造上の不利



③小屋組の経年、雨漏り等による劣化
構造上の不利



④天井のたわみ、雨漏り

①柱の傾きについて

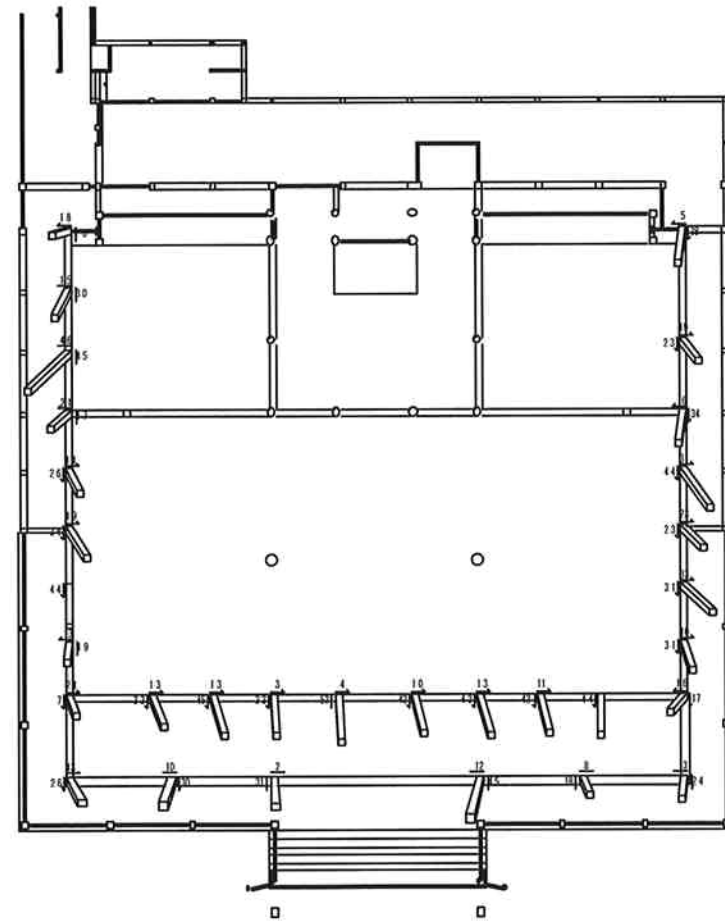
右図のように柱は総じて正面方向へ傾いている。原因としては、柱の腐朽、地盤の沈下が考えられるが、次頁の図のように柱の根元の腐朽は4本程度しかない。次に地盤の沈下についてはレベル調査を行った結果、レベル差は30mm程度しかないので地盤の沈下もほとんどなかったと考えられる。

これらの点から、柱の傾きは経年、もしくは構造的なものと見られ、図にはないが内陣の丸柱も図と同様に正面方向に傾いており、その状態で漆喰壁が塗られていることから、以前から柱は全体的に正面に傾いていたと考えられる。

②壁、建具について

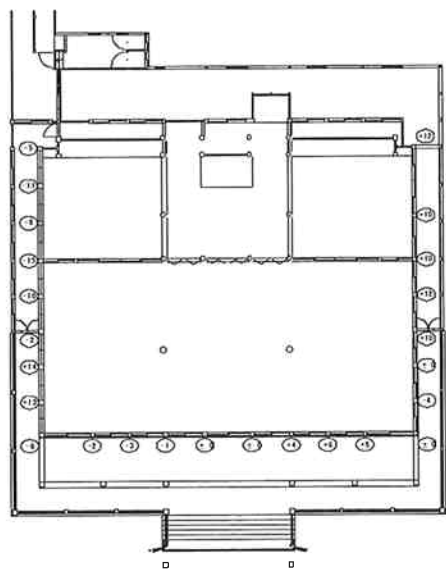
古くからの土壁は貫と土壁が一体となって耐力を発揮する。本堂の外陣の壁は貫部分でひびが入っていたため貫部分で土壁が浮いている可能性があり、耐力が低下していると考えられる。

建具については、柱が傾いていることと深く関係があり、建具がついた後に変形したものは施錠できないようになっている。また、建具の中には柱部分を加工して納めてあるものもある。

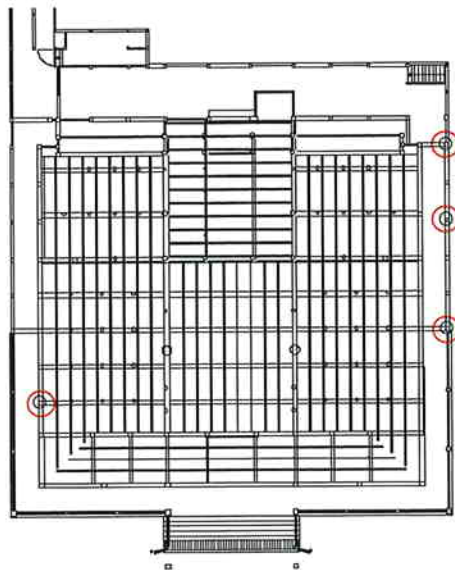


床より2m位置での柱の傾き図

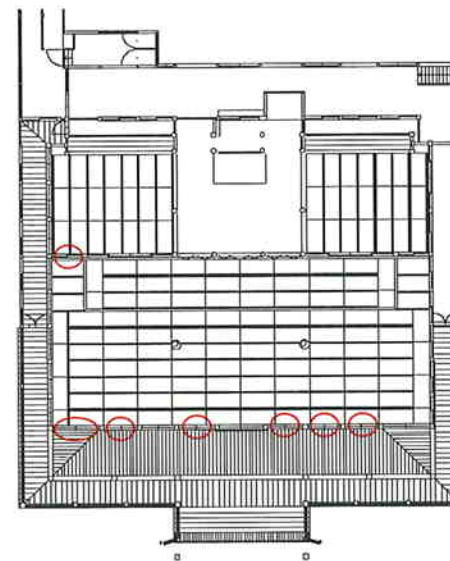
(調査は図の柱において行ったがその他の柱も同様に正面方向に傾いている)



地盤レベル沈下図



床下腐朽材位置図
(○部分:柱の根元腐朽箇所)



漆喰壁貫部分破損位置図
(○部分:漆喰壁破損位置)



外陣東壁面
柱が正面方向に傾いている



南面廊下
柱が傾いていたため敷居、鴨居、建具も傾く
柱を加工して納まるようにしてある建具も見られる



外陣東壁面内側
貫部分でひびが入っている